

# 資料横断的な漢字音・漢語音データベース (DHSJR) における連声濁

島根大学 浅田健太郎

kentasada@soc.shimane-u.ac.jp

## はじめに

漢語の語中における濁音化については、奥村 1952、福永 1958、小林 1970、沼本 1982、榎木 1988、江口 1993、佐々木 1998、山田 2015 等により、諸資料の分析が行われ、その実態が報告されてきた。これらの知見を踏まえて、本発表では中古から現代に至る「資料横断的な漢字音・漢語音データベース」(以下 DHSJR とする)における濁音化の実態を報告する。

なお、前接する鼻音が関与する濁音化を連声濁とし、形態音韻論的な連濁と区別する(高山倫明 1992)ことが定着しつつあるが、本発表は鼻音が関係しない連濁も視野に収めつつ、主に鼻音が関与する事象を対象とする。

奥村 1952 は、保延二年法華経単字の「新濁」に関する記述の存在を主な根拠として、「誦経音資料に認められる連濁現象は、次に示す如く、大体、中古～中世初期頃に行われたものとみなされる」と推定した。また中世から現代にかけて連声濁が減退していることを指摘し、「恐らく中古あたりにおいては、鼻音と連濁との間にはっきりした関係があったのであろうが、それ以後例えば、漢字音学習の影響によって原字音に忠実ならんとする意識が生じたり、或は、信仰と信号、身体と寝台、灌頂と勘定などにおける意味上の区別に与らんとする意図が働いたりして、次第に、現代の如き状態になったのであろう」(17)と主張している。さらに前接字の声調との関わりについて、上昇調の場合に連声濁が起こりやすいことを示した。

このように、すでに奥村 1952 の時点で、漢語における連声濁については、

1. 前接鼻音が関与すること
2. 古い時代は比較的規則的に行われていたこと
3. 中世から現代にかけて減退傾向にあること
4. 去声のあとは連声濁が起こりやすいこと

が指摘されている。

このうち 1 については福永 1958、小林 1970、沼本 1982 等のその後の研究でも同じ傾向が確認されたが、漢語における連声濁の生起において、鼻音が前接することがあくまで必要条件となっているに過ぎず、鼻音韻尾のあとに連声濁を起こさない場合も多いことも繰り返し指摘されてきた(江口 1993、榎木 1988、肥爪 1996、鈴木 2016)。また呉音と漢音では、呉音に連声濁が起こりやすく、漢音に連声濁が起こりにくいことが確認されている(沼本 1982)。

また 2 については、奥村 1952 のほかにも、文献に残らない時代における連濁が例外の少ない規則的な音声同化現象であったことが推論されている(福永 1959、浜田 1960、小林 1970)が、近年は文献上確認できないこともあり否定的な見解が多い(肥爪 1996、佐藤・横沢 2018)。

3 の連声濁の減退については、中世と近世の浄土三部経を比較とした福永 1959、色葉字類抄と日葡辞

書の比較した沼本 1986、江戸から昭和にかけて辞書資料を資料とした飛田 1966 等により歴史の変遷の事実が確認されてきた。一方で減退の原因については諸説があり、その解釈は大きく音的条件に関わる要因とそれ以外の要因に分けることができる。

#### A 音的条件に関わる減退要因

- イ) η 韻尾の鼻音性が失われ、連濁させる能力を失ったため (沼本 1986)
- ロ) 鼻音韻尾後のハ行子音の半濁音化 (沼本 1986)
- ハ) 清濁を弁別する音韻論的特徴が鼻音性の有無から有声性の有無に移行したため<sup>1</sup> (高山倫明 1992、肥爪 1996)
- ニ) 濁音形を条件付けていた撥音・長音の不安定さ (本尊<sup>ホゾン</sup>、遠山<sup>エザン</sup>) (山田 2018)

#### B 音的条件に関わらない減退要因

- イ) 語構成への認識の変化(形態的な切り出し・意味的な分出が不可能→可能)(江口 1994、山田 2015)
- ロ) 熟合度による連声濁形の保存のされやすさの変化 (榎木 1988、佐々木 1998)
- ハ) 漢字音学習によって一字一字の音との結びつきが強固になったため・識字層の拡大に伴う表記の影響 (奥村 1952、飛田 1966、沼本 1986)
- ニ) 意味上の区別のため (信仰-信号、開山-火山<sup>2</sup>) (奥村 1952、山田 2018)
- ホ) 意味伝達の効率性の重視の度合の変化 (佐藤・横沢 2018)
- ヘ) 漢語連声濁の非語頭表示機能の弱さによる生産性の消失 (高山知明 1997)

このうち A イ)に関しては、η 韻尾の仮名転写に際して特別な表記をとる資料があることから、「ウ」で表記されつつも原音の鼻音性を保存していたと考えられており (奥村 1952、沼本 1986)、オノマトベの表記などを証拠に、鎌倉時代に入っても鼻音性を持つものと認識され、国語の母音「ウ (イ)」の変種として把握されていたとされる (肥爪 1996)<sup>3</sup>。実際に連声濁との関わりでも η 韻尾と u 韻尾で連声濁の生起状況が異なる点が指摘され (奥村 1952)、さらに u 韻尾への合流によって連声濁が起こらなくなったことが主張される<sup>4</sup>。

<sup>1</sup> 「中央語において、清濁が今日的な無声／有声の対立となり、濁音を特徴づけていた入りわたり鼻音が弁別性を失ったときに、必然的に、鼻音が後続の清音を濁音に変えることもなくなることになる」(高山倫明 1992 : 121)

<sup>2</sup> 山田 (2018) では、「一山」の濁音形が動詞的なものに及んでいないことについて、「散発的に生じた変化の中で、濁音形の有無が名詞的な語と動詞的な語とを弁別する役割を獲得したためとみなせる。このような機能の獲得自体が、変化が受け入れられた要因といえるだろう」(309) とする。

<sup>3</sup> η 韻尾と u 韻尾の合流については、「この様な書き分けも、院政期末～鎌倉初期には殆どの資料で見られなくなり、撥音韻尾の表記は、-η=ウ・イ、-m=ム、-n=ンの様に定着して行く。この表記の定着から見て、-η 韻尾の鼻音性の消滅の方が、-m と -n の区別の消滅よりも早かったと考えられる。つまり、院政末期～鎌倉初期の時点を取れば、中国語の三内撥音韻尾の中で、-m と -n とは別の音韻として維持したが、喉内撥音韻尾-η は間もなく母音韻尾-u へ合流したという事である。」(沼本 1986 : 169) という意見もある。

<sup>4</sup> 「室町中期成立の洞院実熙著「名目抄」の例を上げてみれば「同心<sup>ドウジム</sup> 當世の人ジムヲ清メテ云」のように「ドウジム」から「ドウシム」へと発音が変化したのは、その背景に [doū] > [dou] の如き

さらに4声調との関係については、連濁する字、前接字とも議論があるが、前接条件については去声調が前接する場合に、連声濁が起こりやすいという傾向が、沼本1982、榎木1988、佐々木1998等で異なる資料により検証されてきた。ただしこの現象は、声調が連声濁の生起に影響を及ぼしているのではなく、語結合に伴って去声化、連声濁が起こると考える向きもある（金田一1976、江口1993）。

DHSJRは、漢文直読・訓読資料、和化漢文資料、和文資料など文献資料の位相的多様性、単漢字単位と漢字連接単位という異なる単位における字音の単位的多様性、平安・鎌倉期から近世期～現代までの字音・漢語音韻史の通史的多様性を確保して設計・制作されている。連声濁という現象は、これらの先行研究の成果から、漢語において音韻交替が起こる現象であり、その生起には単字の字音情報が関わっている。また資料の性格によっても違いがあることが予想され、通時的な変化が認められる点で、DHSJRを活用することにより、連声濁という現象を俯瞰的に捉えられるのではないかと考えた。

以上の考えを踏まえつつ、本発表ではDHSJRにおいて次の点を確認したい。

- ・連声濁には鼻音韻尾後という音声的な条件が適用されているが、音声的な条件に当てはまる例全体において、どの程度連声濁が起こっているかについて確認し、歴史的な変遷の事実を捉え、その変遷の要因として妥当なものは何かを検討する。
- ・ŋ韻尾後の連声濁が減少することは、『名目抄』の「同心」等の例によってŋ韻尾における鼻音性の消失（u韻尾への合流）の時期と結びつけられてきたが、全体的にみたとき、ŋ韻尾後の連声濁が減少するのか、あるいはどの時期に減少しているのかを確認する。
- ・呉音主体資料と漢音主体資料の連声濁生起率を比較し、漢音資料における連声濁が少ないことを検証する。
- ・資料の性格による違いの有無を確認する。
- ・連声濁が起こらない字の検討
- ・声調との関係の量的側面について、資料の声点体系の全体的分布と、連声濁が起こらない例の分布を考慮にいれたうえで、実態を把握する。

## データベースへの追加情報の付加

上の諸項の把握を目指して、本発表では、DHSJR（バージョン20240330）に対して次の情報を追加した。

### A. 韻尾情報・後続字情報

データベースの各レコードの漢字の韻尾を、既存の宋本廣韻データと対応させることによって付与した。またそれぞれのレコードの見出し字について、その字が含まれる漢語の情報と漢語における位置の情報によって直後の字（後続字＝連声濁が生起する可能性がある字）を特定し、すべてのレコードに付与した。

### B. 後続字の潜在的な連声濁可能性についての情報

---

鼻音性の脱落が考えられる。漢音・呉音・宋音を含めて室町以前のウ表記鼻音韻尾字が現代に継承された形として全て非撥音形で定着しているのは、この室町時代以前に非鼻音化を完了したためであると推定せられるのである。」（沼本1997：711）

データベースに出現する漢字の字音表を作成し、それぞれの例に濁音標示がある場合にそれが連声濁によって生じた濁音であるか、本来の字音形であるかどうかを判定したうえで、A で DHSJR に加えた各レコードの後続字に対して、その情報を付与した。

### C. 後続字の、当該資料における内部徴証による清濁標示情報

A で DHSJR に付与した各レコードの後続字に対して、仮名注や声点等により清濁を判定し、その情報を付与した。

以下、それぞれについて詳しく説明する。

#### A. 韻尾情報・後続字情報の付与

1. 「漢字データベース」(<https://kanji-database.sourceforge.net/dict/sbgy/>) で提供されている宋本広韻データ xml 版 (sbgy.xml) をテーブル化し (エクセルで読みこみ)、漢字音・漢語音 DB の個々のレコードと韻目を対応付ける。対応にはまず「単字\_見出し」を用い、広韻になれば「単字\_出現形」や異体字 (漢字データベースの異体字フィルタ用変換表 "variants.txt" (<https://kanji-database.sourceforge.net/variants/search.html>)) も利用した。
2. 韻目にしたがって、各レコードに鼻音韻尾字 (-m, -n, -ŋ) と母音韻尾字 (-u) の 4 種の韻尾情報を付与する。
  - ・韻尾の異なる複数の韻目に所属する字については、例ごとに資料内の内部徴証 (声点・仮名注・反切・類音字等) を参考にし、韻尾を判断した (たとえば、「樂」字は廣韻で效韻 (-u)、覺韻 (-k)、鐸韻 (-k) という複数の韻目に所属するが、「大般若波羅蜜多經\_根津美術館」の 20-001-01-000048 の例では仮名注に「〔墨〕カク」とあることから、韻尾情報として「k」を付与し、同資料 20-001-01-000745 の例では仮名注に「〔墨〕ケウ」とあることから、韻尾情報として「u」を付与した。ただし、同資料の 20-001-01-000013 の例のように、声点に「入/平濁」のごとく二種がある場合は、「u/k」のように二種の韻尾情報を付与した)。
  - ・内部徴証がない場合は、他例で主流である仮名音形にしたがって、韻尾情報を付与した (たとえば「井」字は廣韻で静韻 (-ŋ) と感韻 (-m) に属するが、DHSJR の範囲ではシャウ・セイ等であり、一ム (ン) の例がないため、仮名注のない例も仮名注のある例に準じて、韻尾を「ŋ」とした)。ただし、主流である仮名音形を判別しがたい場合は、「ŋ/m」のように二種の韻尾情報を付与した。
3. DHSJR における「漢語\_見出し」「位置」によって、各レコードの見出し字が含まれる漢語において、見出し字の直後に位置する字を「後続字」として各レコードに付与する。
  - ・「惡」(平曲譜本 60-028-01-18) : 「漢語\_見出し」: 惡所、「位置」: 1⇒「後続字」: 所
  - ・「所」(平曲譜本 60-028-01-19) : 「漢語\_見出し」: 惡所、「位置」: 2⇒「後続字」: なしまた、踊り字「々」「々」「々」については、直前の字を後続字とした。なお、漢語の区切り方の認定については入力者に任されているので、その単位は今のところ恣意的となっており、漢文直読資料では特にその傾向が強い。

#### B. 後続字の潜在的な「連声濁可能性」情報を付与

4. DHSJR の「単字\_見出し」によって頻度表を作成し、頻度 11 以上の漢字 2682 字について、三省堂

『全訳漢辞海 第四版』(アプリ版)によって呉音・漢音・慣用音の字音表(以下「漢辞海字音表」)を作成する<sup>5</sup>。なお、DHSJRの全272336レコード、異なり字6917字のうち、頻度11以上の2682字でDHSJRの259402レコードを占め、およそ95%をカバーする。

5. 「漢辞海字音表」において、呉音・漢音・慣用音ごとに清濁を判定し、連声濁が起こり得るかどうかを漢字ごとに判断する。具体的には、呉音・漢音・慣用音のいずれかに頭音がカ行・サ行・タ行・ハ行である字音が含まれる場合は、「連声濁が起きる可能性がある字」とみなす<sup>6</sup>。意味による字音の異なりについては考慮せず、字ごとに判断する。その結果、2682字のうち、1963字が連声濁の起こる可能性のある字、714字が可能性のない字と判断した(残りの5字は「𠄎」「?」「々」「𠄎」「𠄎」であり、「𠄎」「𠄎」については漢辞海に見出しが立てられていないもの)。

例) ○連声濁の可能性あり、×連声濁の可能性なし

○山:(漢音) サン、(呉音) セン、(慣用音) なし

→漢音サン、呉音センが連声濁によってザン、ゼンになる可能性がある

○度:(漢音) ト・タク、(呉音) ド、(慣用音) なし

→漢音ト・タクが連声濁によってド・ダクになる可能性がある

○大:(漢音) タイ・タ、(呉音) ダイ・タイ・ダ、(慣用音) なし

→漢音タイ・タ、呉音タイが連声濁によってダイ・ダになる可能性がある

○夫:(漢音) フ、(呉音) フ・ブ、(慣用音) フウ

→漢音フ、呉音フ、慣用音フウが連声濁によってブ・ブウになる可能性がある

○能:(漢音) ドウ・ダイ、(呉音) ノウ・タイ・ナイ、(慣用音) なし

→呉音タイ(下線)が連声濁によってダイになる可能性がある

○著:(漢音) チヨ・チャク、(呉音) チヨ・ヂヤク、(慣用音) チャク

→漢音チヨ・チャク、呉音チヨ、慣用音チャク(下線)が連声濁によってヂヨ・ヂヤクになる可能性がある

×人:(漢音) ジン、(呉音) ニン、(慣用音) なし

→連声濁が起こる可能性なし

×御:(漢音) ギヨ・ガ、(呉音) ゴ、(慣用音) なし

→連声濁が起こる可能性なし

6. 前項5で連声濁が起こる可能性があると判断した1963字について、当該字が複声点等によって濁音であることが知られる場合に、それが確実に連声濁によるものと確定できるかどうかを検討した。具体的には、漢音・呉音・慣用音のいずれにも濁音形がない場合は、その濁音は確実に連声濁によるものと判断される。この結果、文献内の声点等の内部徴証によって濁音であると分かる場合において、確実に連声濁によるものと判断できる字が1425字、連声濁によるか本来単字字音形である

<sup>5</sup> 連声濁形であるか、非連声濁形(本来の字音形)であるかを判定するために、本来の字音形を設定する必要がある。従来先行研究では、典型的な字音系の確定に際して、『全訳漢辞海』には、「漢音・呉音については、江戸期以後の推定や演繹による読みを退け、鎌倉・室町以前の古辞書などにのこる字音資料にもとづくことにした」という方針が示されており、石山2022も「沼本(1995)で批判されている問題点はざいぶん解決されている」(6)とするため、字音形の確定に適していると考えた。

<sup>6</sup> 正確には連声濁のみならず、鼻音が関与しない連濁である可能性も含まれるが、本発表では鼻音が前接する例に焦点を当てるため、連声濁で代表させる。

か、双方の可能性のある字が 538 字となった。

例) ●確実に連声濁と判断できる字、◎連声濁が起こる可能性はあるが、本来の字音形である可能性もある字

●生：(漢音) セイ、(呉音) シヤウ、(慣用音) なし

→「生」に複声点が付される場合、漢音であればゼイ、呉音であればジャウを示しており、いずれにしても連声濁形であることが確実である

●法：(漢音) ハフ、(呉音) ホフ、(慣用音) ホツ・ハツ

→「法」に複声点が付される場合、漢音であればバフ、呉音であればボフ、慣用音であればボツ・バツを示しており、いずれにしても連声濁形であることが確実である

●葉：(漢音) エフ・セフ、(呉音) エフ・セフ、(慣用音) なし

→「葉」に複声点が付される場合、エフが連声濁を起こす可能性はないため、漢音・呉音セフが連声濁を起こした連声濁形ゼフであることが確実である

●野：(漢音) ヤ・シヨ、(呉音) ヤ、(慣用音) なし

→「野」に複声点が付される場合、ヤが連声濁を起こす可能性はないため、漢音シヨが連声濁を起こした連声濁形ジヨであることが確実である

●和：(漢音) クワ、(呉音) ワ、(慣用音) なし

→「和」に複声点が付される場合、その仮名音形グワが連声濁によることが確実である

●紙：(漢音) シ、(呉音) なし、(慣用音) なし

→「紙」に複声点が付される場合、その仮名音形ジが連声濁によることが確実である

◎上：(漢音) シヤウ、(呉音) ジャウ、(慣用音) なし

→「上」に複声点が付される場合、その仮名音形ジャウが漢音シヤウの連声濁によるものか、呉音ジャウかはただちに確定できない

◎台：(漢音) タイ・イ、(呉音) なし、(慣用音) ダイ

→「台」に複声点が付される場合、その仮名音形ダイが漢音タイの連声濁によるものか、慣用音ダイかはただちに確定できない

◎劫：(漢音) ケフ、(呉音) コフ、(慣用音) ゴフ

→「劫」に複声点が付される場合、ゲフもしくはゴフが仮名音形となるが、それが漢音ケフ・呉音コフの連声濁によるものか、慣用音ゴフかはただちに確定できない

◎夫：(漢音) フ、(呉音) フ・ブ、(慣用音) フウ

→「夫」に複声点が付される場合、ブもしくはブウが仮名音形となるが、それが漢音・呉音フあるいは慣用音フウの連声濁によるものか、呉音ブかはただちに確定できない

以上の作業によって、DHSJR に出現する異なり字の構成は次の通りとなる。

DHSJR に出現する異なり字：6917 字

頻度 11 以上の字：2682 字

呉音・漢音・慣用音のいずれかにカ・サ・タ・ハ行が含まれる字  
(連声濁が起こる可能性がある)：1963 字

呉音・漢音・慣用音に濁音形がない字  
(濁音であれば連声濁による濁音化と考えられる)：1425 字

7. DHSJR の各レコードに付与した後続字に対して「漢辞海字音表」を参照して、各レコードの後続字が連声濁の可能性のある字かどうか(前項 5)、また濁音である場合確実に連声濁による濁音であると言えるかどうか(前項 6)の情報を付与する。
8. 以上 4 から 7 の手続きの結果、DHSJR の各レコードは後続字について次のような内訳を示す。

全レコード：272341 件

- 後続字のないレコード(後続字が「ㇿ」「■」などの記号類である例を含む)：130267 件
- 後続字のあるレコード：142074 件
  - 後続字が「漢辞海字音表」にない：4695 件
  - 後続字に連声濁の可能性なし(濁音形のみ)：39759 件
  - 後続字に連声濁の可能性あり(清音形あり)：97620 件
    - 後続字に濁音形と清音形がある(濁音標示がある場合、本来の字音形もしくは連声濁による濁音化であると解釈される例)：33895 件
    - 後続字が清音形のみである(濁音標示がある場合、連声濁による濁音化であると解釈される例)：63725 件

本発表では、「後続字が清音形のみである(呉音・漢音・慣用音に濁音形がない)」1425 字 63725 例を対象とすることで、1 例ずつ呉音・漢音を判定し、連声濁形か非連声濁形かを確定させていくのではなく、双点があれば連声濁が起こっているとみなせる例において、双点と単点の割合を比較する。

### C. 当該資料における後続字の内部徴証による清濁標示情報の付与

9. 後続字について、さらに内部徴証によって濁音であることが確実であるかどうかを確かめた。DHSJR における「声点」等の記載によって、単声点のものを「清」、複声点のものを「濁」、単複両方が付されているものを「清/濁」、声点がないものを「声点なし」とした。また「平曲譜本」では「漢語\_出現形」の濁点を、「邦訳日葡辞書」「和英語林集成第三版」についてはローマ字綴りを、「三省堂初版明解アクセント辞典」については仮名注を利用し、「清」「濁」を判断した。その結果、濁音標示がある場合、連声濁による濁音化であると解釈される 63725 件について、当該資料における清濁標示は次の通りであった。

「声点等なし」(内部徴証によって清濁が確定できない例)： 18872 件

「清」(内部徴証によって清音であることが標示されている例)： 40874 件

「濁」(内部徴証によって濁音であることが標示されている例)： 3975 件

「清／濁」(内部徴証によって清音・濁音の双方が示されている例)： 4 件

ただし、単点により清音標示がなされている場合は、連声濁の可能性がないア行・ナ行・マ行・ヤ行・ラ行・ワ行の可能性もある。たとえば「同<sub>(去濁)</sub>トウ黄<sub>(上)</sub>ワウ」〔色葉字類抄\_尊経閣文庫\_三卷本 30-017-01-002383〕の「黄」(呉音ワウ、漢音クワウ)は、非連声濁形のクワウでなく、そもそも連声濁の可能性がないワウである。「清」のなかにはこのように連声濁の可能性のない例も混入しているが、わずかであり、無視できる程度の誤差であると判断した。

また、呉音・漢音・慣用音に濁音形が含まれる字でも連声濁を起こしている可能性がある。たとえば「如有壯<sub>(去)</sub>シヤウ夫<sub>(上濁)</sub>フ」〔大般若波羅蜜多經\_根津美術館 20-001-01-006109〕では、「夫」が『漢辞海』で呉音に「フ・ブ」とあるため、「夫」の濁音が本来の呉音形か、連声濁によって生じたものか、判別がつかない。本発表ではこのような例(上図で「呉音・漢音・慣用音のいずれかに清音形がある字」1963 字－「呉音・漢音・慣用音に濁音形がない字」1425 字＝538 字)を対象外する。これらの例は一例ずつ呉音か漢音かを判断したうえで、仮名注を考慮にいればさらに精度を高めることができるが、本発表では大量の用例をおおまかに判断することに力点を置く。

上のうち、「清」と「濁」の 44839 例に注目する。

さらに、DHSJR に付される書誌情報(Bibliography\_20240617.md)等によって、資料ごとに時代(上代・平安・鎌倉・南北朝・室町・江戸・明治・大正・昭和)、位相(漢文直読資料・漢文訓読資料・和化漢文訓読資料・和文資料等)、字音系統(呉音・漢音・呉音／漢音・新漢音)を指定し、それらの情報を各レコードに付した。レコードの例を次に示す。

表 1 情報追加後のデータベースのレコード例（省略した列もある）

時代	位相	字音系統	資料名	単字_見出し	単字出現形	漢語_見出し	漢語_出現形	韻目	韻尾(判定済み)	漢語_alphabet	後続字	後続字_連濁の可能性	後続字_連濁蓋然性	後続字_清濁表示	声点	声点型	仮名注	仮名型
平安	漢文直読資料	呉音	大般若波羅蜜多經_根津美術館	辛	辛	各受辛酸	各受辛酸	真	n		酸	あり	確実な連濁	濁	〔墨〕入	**入去濁	〔墨〕シン	**シンサン
平安	漢文直読資料	呉音	大般若波羅蜜多經_根津美術館	酸	酸	各受辛酸	各受辛酸	桓	n						〔墨〕去濁	**入去濁	〔墨〕サン	**シンサン
平安	漢文直読資料	呉音	大般若波羅蜜多經_根津美術館	恭	恭	恭順師長	恭順師長	鍾	ŋ		順	あり	小	濁	〔朱〕去	去平濁上平	〔墨〕クウ	クウ**
平安	漢文直読資料	呉音	大般若波羅蜜多經_根津美術館	順	順	恭順師長	恭順師長	稗	n		師	あり	確実な連濁	清	〔朱〕平濁	去平濁上平		クウ**
平安	漢文直読資料	呉音	大般若波羅蜜多經_根津美術館	侵	侵	來見侵毀	來見侵毀	侵	m		毀	あり	確実な連濁	清	〔朱〕(虫)	** * 平	〔墨〕シム	**シムクキ
平安	漢文直読資料	呉音	大般若波羅蜜多經_根津美術館	毀	毀	來見侵毀	來見侵毀	紙/寘	i						〔朱〕平	** * 平	〔墨〕クキ	**シムクキ
鎌倉	字書・辞書	漢音	色葉字類抄_尊経閣文庫_三卷本	引	引	引級	引級	軫/震	n		級	あり	確実な連濁	濁	上	上入濁	イン	インキフ
鎌倉	字書・辞書	漢音	色葉字類抄_尊経閣文庫_三卷本	級	級	引級	引級	緝	p						入濁	上入濁	キフ	インキフ
鎌倉	和文資料等	呉音	三帖和讀_専修寺	往	往	往生	往生	養	ŋ		生	あり	確実な連濁	濁	平	平去濁		
鎌倉	和文資料等	呉音	三帖和讀_専修寺	生	生	往生	往生	庚/映	ŋ						去濁	平去濁		
南北朝	和化漢文訓読資料	呉音・漢音	新猿樂記_尊経閣文庫_康永本	長	長	長者	長者	陽/養/漾	ŋ		者	あり	確実な連濁	濁	〔朱〕平	平平濁		
南北朝	和化漢文訓読資料	呉音・漢音	新猿樂記_尊経閣文庫_康永本	者	者	長者	長者	馬	o						〔朱〕平濁	平平濁		
室町	字書・辞書	呉音・漢音	邦訳日葡辞書	軍	軍	軍配	軍配	文	n	gunbai	配	あり	確実な連濁	濁			グン	グンバイ
室町	字書・辞書	呉音・漢音	邦訳日葡辞書	配	配	軍配	軍配	隊	i	gunbai							バイ	グンバイ
江戸	和文資料等	呉音・漢音	平曲譜本	貫	貫	貫首	貫首 <sup>〴</sup>	桓/換	n		首	あり	確実な連濁	濁				
江戸	和文資料等	呉音・漢音	平曲譜本	首	首	貫首	貫首 <sup>〴</sup>	有/宥	u									
昭和	字書・辞書	呉音・漢音	三省堂初版明解日本語アクセント辞典	庵	庵	庵室	庵室	覃/合	m		室	あり	確実な連濁	濁			アン	アンジツ
昭和	字書・辞書	呉音・漢音	三省堂初版明解日本語アクセント辞典	室	室	庵室	庵室	質	t								ジツ	アンジツ

## DHSJR の連声濁

### 時代ごとの連声濁生起率の変遷

まずは呉音か漢音かなど、諸条件を考慮せず、後続字が清音形のみであり（内部徴証によって濁音であることが示されている場合、連声濁による濁音であることが確実な例）、かつ清濁標示のある 44839 例のうち、m 韻尾、n 韻尾、ŋ 韻尾、u 韻尾が前接する 21841 例を取り出し<sup>7</sup>、時代ごとの変化をみる。

なお先に述べたように、下表においては、呉音・漢音・慣用音に濁音形が含まれない字を対象としているため、双点により濁音標示がなされている場合（下表「濁」にあたる）、確実に連声濁を起こしているものと判断できる。

表 2 時代ごとの清濁標示の変遷

	平安			鎌倉			南北朝			室町			明治			昭和			計
	清	濁	計	清	濁	計	清	濁	計	清	濁	計	清	濁	計	清	濁	計	
m	78	4	82	332	242	574	4	6	10	219	79	298	228	35	263	777	92	869	2096
n	253	23	276	975	619	1594	10	23	33	886	361	1247	929	134	1063	3212	256	3468	7681
ŋ	282	8	290	1302	674	1976	19	14	33	839	284	1123	851	120	971	3387	228	3615	8008
u	177	4	181	844	16	860	16	2	18	593	24	617	479	18	497	1851	32	1883	4056
計	<b>790</b>	<b>39</b>	<b>829</b>	<b>3453</b>	<b>1551</b>	<b>5004</b>	<b>49</b>	<b>45</b>	<b>94</b>	<b>2537</b>	<b>748</b>	<b>3285</b>	<b>2487</b>	<b>307</b>	<b>2794</b>	<b>9227</b>	<b>608</b>	<b>9835</b>	<b>21841</b>

表 1 をもとに、鼻音韻尾のあとの清音の清濁標示により、各韻尾ごとに濁音化が起こる比率（連声濁生起率＝濁音例／（清音例＋濁音例）×100）を算出すると、次のようになる。

<sup>7</sup> 「平曲譜本」（江戸）については、濁点による濁音標示があるが、清音と判断できる材料がないため、集計から除いた（119 例）。また、韻尾が一種に定まらない 23 例（「莽」姥/蕩/厚韻（ø/u/ŋ）など）も除外した。

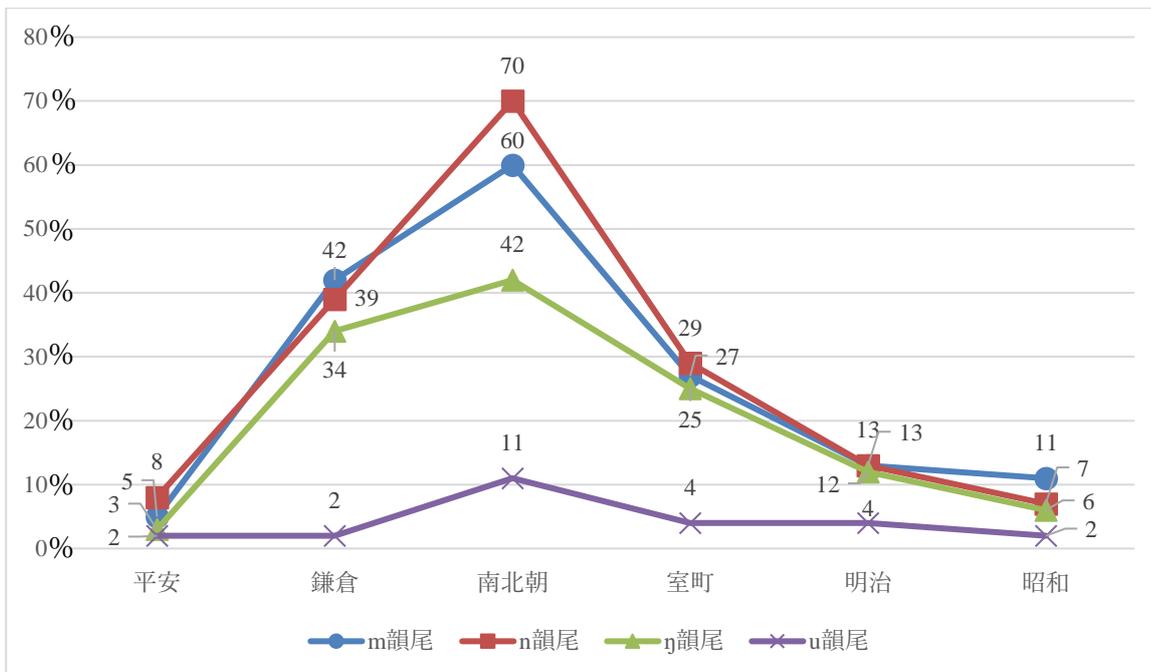


図 1 時代ごとの濁音化生起率 (数字は連声濁生起率 (%))

- ・平安時代の生起率には、ほぼ大般若波羅蜜多經\_根津美術館<sup>8</sup>の状況がそのまま反映されている。平安から鎌倉にかけての増大について、大般若経と他の時代の濁音化生起率と比較できるかは、本資料の声点の性質を詳しく検討する必要があるが(後述)、少なくとも同資料内で鼻音韻尾と u 韻尾の間にあまり差がないことには注目すべきである。
- ・同様に南北朝は新猿楽記\_尊経閣文庫\_康永本、室町は邦訳日葡辞書、明治は和英語林集成第三版、昭和は三省堂初版明解日本語アクセント辞典の状況が反映され、格納する資料の増補が課題となる。
- ・諸氏の指摘するように、古い時代に連濁が規則的であった事実は確認できず、むしろ中世に入って盛んになっている。
- ・連声濁(鼻音の関与する濁音化)の減少には、η 韻尾の非鼻音化(沼本 1986)、濁音の弁別的特徴の交替(鼻音性→有声性)が関わる(高山倫明 1992、肥爪 2019)という意見がある。そこから予想される連声濁減退のモデルは、次のようなものであろう。(鼻音性を有している時代の η 韻尾後の連声濁の生起率は同じ鼻音韻尾の m・n 韻尾後と同等であり、その後 u 韻尾への合流によって、連濁生起率は u 韻尾後に近づくはずである。また m・n 韻尾は濁音の弁別的特徴の交替を契機として減少に転じるが、η 韻尾・u 韻尾は鼻音性を持たないので、影響を受けない)

<sup>8</sup> 「鎌倉中期の加点本であるものの訓点は移点したものであり、移点原本は、院政期の字音を加点したものと考えられる」(Bibliography\_20240617.md)

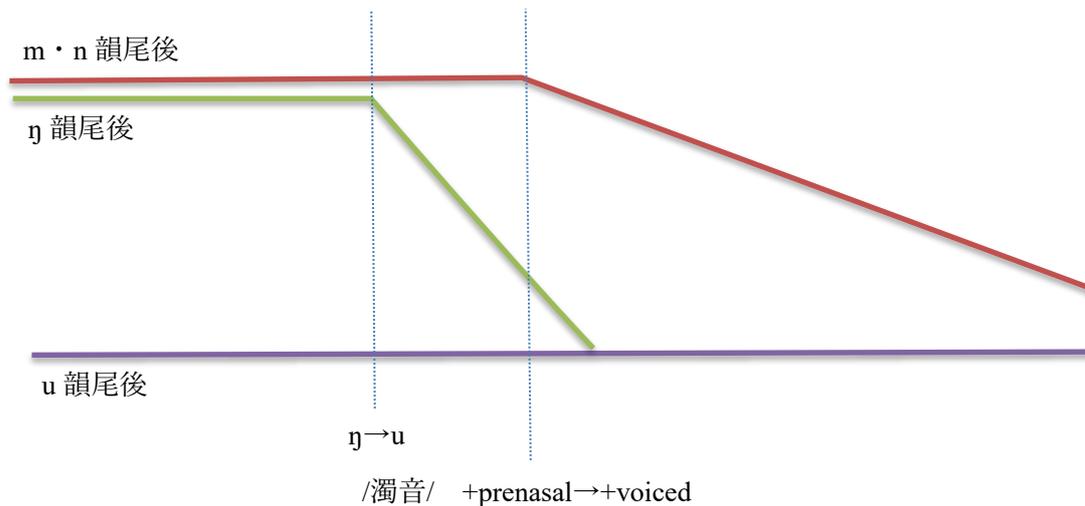


図 2 鼻音性の消失に伴う連声濁生起率低下の予想モデル

- ・ 図 2 の予想に対して、実際は図 1 に示したような変遷の動向を見せる。
- ・  $\eta$  韻尾後の連声濁のみが大きく減っているという現象は見取れない（ただし後述するように、いくつか  $\eta$  韻尾後の連声濁生起率が低い資料もある）。 $\eta$  韻尾が  $u$  韻尾と合流したのちでも、両者の生起率には隔たりがある。
  - ⇒ 院政末～室町初にかけて  $\eta$  韻尾から鼻音性が消失し  $u$  に変化し、それが連声濁減退の一因とも考えられてきた<sup>9</sup>が、 $\eta$  韻尾の  $u$  韻尾への合流は、連声濁の減退に大きな影響を与えていない。
  - ⇒ 鎌倉から南北朝にかけての増加、南北朝から室町にかけての減少は、鼻音性が前接するものだけでなく、鼻音性を失った  $\eta$  韻尾・鼻音性を持たない  $u$  韻尾をも覆う現象である可能性がある。
- ・ 鼻音性を消失した  $\eta$  韻尾も、鼻音韻尾と歩調を合わせて濁音化が減少している
  - ⇒ 連声濁の減退の原因について、鼻音韻尾の後続清音を濁音化する力の弱化があり、その背後には清濁の区別に関わる弁別の特徴として鼻音性の有無が関与しなくなったことが挙げられる（高山倫明 1992、肥爪 2019）。しかしながら上に示したように、鼻音性を消失した  $\eta$  韻尾も、鼻音韻尾と歩調を合わせて濁音化が減少していることから、濁音の弁別の特徴の交替の影響は小さい可能性がある。その場合、一時生産的だった連声濁は、中世前期には濁音の弁別の特徴が入れ替わるのと無関係に語・字に語形として濁音形が固定化し、徐々に本来の字音形に回帰していったものと考えられる（江口 1994、高山知明 1997）。

### 資料ごとの連声濁生起率

次に、資料名の右側には、声点の加点状況を示すため、後接字の有無を問わず、その資料の声点全例についての集計を太字で示した（行の最右欄「計」は、その資料に出現する単字の総数であり、このなかには声点のない例、単点と双点の双方が加点されている例が含まれている）

<sup>9</sup> 沼本 1986 (249) は連濁の現象の要因を、①  $[-\ddot{u}] > [-u]$  の変化に従って喉内撥音韻尾字が連濁させる能力を失った、②唇内・舌内撥音韻尾字の後でのハ行音字の連濁が、パ行音化に取って替わられた、識字層の拡大に伴ない、③濁音符の普及の不十分であった文字表記に引かれて清音での発音の勢力が強まって行ったとする。

表 3 資料ごとの清濁標示

	資料	清		濁		計		
平安	大般若波羅蜜多經_根津美術館	<b>7472</b>	<b>54%</b>	<b>1546</b>	<b>11%</b>	<b>13902</b>	<b>100%</b>	
		m	65	94%	4	6%	69	100%
		n	182	89%	23	11%	205	100%
		η	192	96%	8	4%	200	100%
	u	139	97%	4	3%	143	100%	
	医心方_半井家旧蔵	<b>2692</b>	<b>92%</b>	<b>6</b>	<b>0%</b>	<b>2916</b>	<b>100%</b>	
		m	12	100%	0	0%	12	100%
		n	63	100%	0	0%	63	100%
		η	79	100%	0	0%	79	100%
	u	33	100%	0	0%	33	100%	
	医心方_仁和寺	<b>284</b>	<b>79%</b>	<b>1</b>	<b>0%</b>	<b>359</b>	<b>100%</b>	
		m	1	100%	0	0%	1	100%
		n	8	100%	0	0%	8	100%
		η	11	100%	0	0%	11	100%
	u	4	100%	0	0%	4	100%	
	大東急記念文庫_金光明最勝王經音義	<b>483</b>	<b>60%</b>	<b>33</b>	<b>4%</b>	<b>804</b>	<b>100%</b>	
u		1	100%	0	0%	1	100%	
鎌倉		莊子_高山寺_乙	<b>188</b>	<b>64%</b>	<b>4</b>	<b>1%</b>	<b>292</b>	<b>100%</b>
			m	1	100%	0	0%	1
	η		1	100%	0	0%	1	100%
u	1	100%	0	0%	1	100%		
世俗諺文_天理大学図書館	<b>2357</b>	<b>84%</b>	<b>309</b>	<b>11%</b>	<b>2803</b>	<b>100%</b>		
	m	11	85%	2	15%	13	100%	
	n	88	92%	8	8%	96	100%	
	η	115	94%	7	6%	122	100%	
u	51	98%	1	2%	52	100%		
遊仙窟_金剛寺	<b>272</b>	<b>41%</b>	<b>36</b>	<b>5%</b>	<b>668</b>	<b>100%</b>		
	m	1	100%	0	0%	1	100%	
	n	4	100%	0	0%	4	100%	
	η	13	93%	1	7%	14	100%	
u	4	100%	0	0%	4	100%		
遊仙窟_醍醐寺	<b>437</b>	<b>58%</b>	<b>69</b>	<b>9%</b>	<b>749</b>	<b>100%</b>		
	m	3	100%	0	0%	3	100%	
	n	11	100%	0	0%	11	100%	
	η	13	93%	1	7%	14	100%	
u	8	100%	0	0%	8	100%		
阿弥陀経_西本願寺	<b>2051</b>	<b>71%</b>	<b>854</b>	<b>29%</b>	<b>2908</b>	<b>100%</b>		
	m	21	30%	49	70%	70	100%	
	n	46	41%	66	59%	112	100%	
	η	91	65%	48	35%	139	100%	
u	44	98%	1	2%	45	100%		
浄土論註_西本願寺	<b>213</b>	<b>42%</b>	<b>33</b>	<b>6%</b>	<b>513</b>	<b>100%</b>		
	η	0	0%	1	100%	1	100%	
	群書治要_金沢文庫_経部	<b>2744</b>	<b>72%</b>	<b>326</b>	<b>9%</b>	<b>3827</b>	<b>100%</b>	
		m	6	100%	0	0%	6	100%
n		21	100%	0	0%	21	100%	
η		29	100%	0	0%	29	100%	
u	18	100%	0	0%	18	100%		
尾張国郡司百姓等解文_早稲田大学図書館	<b>298</b>	<b>59%</b>	<b>89</b>	<b>18%</b>	<b>501</b>	<b>100%</b>		
	m	6	100%	0	0%	6	100%	
	n	21	100%	0	0%	21	100%	
	η	29	100%	0	0%	29	100%	
u	18	100%	0	0%	18	100%		

	m	3	100%	0	0%	3	100%
	n	5	31%	11	69%	16	100%
	ŋ	6	46%	7	54%	13	100%
	u	6	100%		0%	6	100%
尾張国郡司百姓等解文_東京大学史料編纂所		<b>104</b>	<b>18%</b>	<b>17</b>	<b>3%</b>	<b>564</b>	<b>100%</b>
	n	1	50%	1	50%	2	100%
	ŋ	3	75%	1	25%	4	100%
	u	1	100%	0	0%	1	100%
尾張国郡司百姓等解文_真福寺		<b>28</b>	<b>23%</b>	<b>21</b>	<b>17%</b>	<b>124</b>	<b>100%</b>
	n	0	0%	1	100%	1	100%
	ŋ	0	0%	1	100%	1	100%
新猿楽記_尊経閣文庫_古抄本		<b>504</b>	<b>69%</b>	<b>227</b>	<b>31%</b>	<b>733</b>	<b>100%</b>
	m	3	50%	3	50%	6	100%
	n	13	39%	20	61%	33	100%
	ŋ	12	46%	14	54%	26	100%
	u	14	100%	0	0%	14	100%
新猿楽記_尊経閣文庫_弘安本		<b>188</b>	<b>60%</b>	<b>126</b>	<b>40%</b>	<b>314</b>	<b>100%</b>
	m	2	33%	4	67%	6	100%
	n	1	11%	8	89%	9	100%
	ŋ	6	55%	5	45%	11	100%
	u	10	100%	0	0%	10	100%
色葉字類抄_尊経閣文庫_三卷本		<b>7705</b>	<b>64%</b>	<b>1080</b>	<b>9%</b>	<b>12015</b>	<b>100%</b>
	m	88	84%	17	16%	105	100%
	n	161	71%	65	29%	226	100%
	ŋ	209	76%	65	24%	274	100%
	u	175	99%	1	1%	176	100%
三帖和讃_専修寺		<b>2610</b>	<b>63%</b>	<b>1376</b>	<b>33%</b>	<b>4136</b>	<b>100%</b>
	m	28	70%	12	30%	40	100%
	n	104	50%	105	50%	209	100%
	ŋ	90	49%	94	51%	184	100%
	u	69	100%	0	0%	69	100%
尊号眞像銘文_法雲寺_略本		<b>1024</b>	<b>41%</b>	<b>468</b>	<b>19%</b>	<b>2471</b>	<b>100%</b>
	m	16	64%	9	36%	25	100%
	n	40	54%	34	46%	74	100%
	ŋ	47	57%	36	43%	83	100%
	u	43	100%	0	0%	43	100%
尊号眞像銘文_専修寺_広本		<b>252</b>	<b>5%</b>	<b>59</b>	<b>1%</b>	<b>4644</b>	<b>100%</b>
	m	2	33%	4	67%	6	100%
	n	10	59%	7	41%	17	100%
	ŋ	11	92%	1	8%	12	100%
	u	13	100%	0	0%	13	100%
西方指南抄_専修寺		<b>64</b>	<b>0%</b>	<b>13</b>	<b>0%</b>	<b>2090</b>	<b>100%</b>
	m	2	100%	0	0%	2	100%
	n	3	100%	0	0%	3	100%
	ŋ	7	100%	0	0%	7	100%
	u	1	100%	0	0%	1	100%
唯信抄_西本願寺		<b>613</b>	<b>39%</b>	<b>299</b>	<b>19%</b>	<b>1576</b>	<b>100%</b>
	m	7	33%	14	67%	21	100%
	n	14	37%	24	63%	38	100%
	ŋ	15	63%	9	38%	24	100%
	u	31	97%	1	3%	32	100%

唯信鈔_專修寺		<b>634</b>	<b>34%</b>	<b>293</b>	<b>16%</b>	<b>1883</b>	<b>100%</b>
	m	8	38%	13	62%	21	100%
	n	14	35%	26	65%	40	100%
	η	15	65%	8	35%	23	100%
	u	31	100%	0	0%	31	100%
貞享版四座講式		<b>1398</b>	<b>72%</b>	<b>526</b>	<b>27%</b>	<b>1930</b>	<b>100%</b>
	m	7	35%	13	65%	20	100%
	n	16	38%	26	62%	42	100%
	η	36	49%	38	51%	74	100%
	u	29	97%	1	3%	30	100%
宝曆版四座講式		<b>4057</b>	<b>71%</b>	<b>1626</b>	<b>28%</b>	<b>5724</b>	<b>100%</b>
	m	12	26%	34	74%	46	100%
	n	65	45%	79	55%	144	100%
	η	117	48%	128	52%	245	100%
	u	66	96%	3	4%	69	100%
大慈院本四座講式		<b>1384</b>	<b>72%</b>	<b>518</b>	<b>27%</b>	<b>1918</b>	<b>100%</b>
	m	12	46%	14	54%	26	100%
	n	15	36%	27	64%	42	100%
	η	35	48%	38	52%	73	100%
	u	27	93%	2	7%	29	100%
正徳版四座講式		<b>4071</b>	<b>71%</b>	<b>1634</b>	<b>29%</b>	<b>5729</b>	<b>100%</b>
	m	11	26%	32	74%	43	100%
	n	62	44%	80	56%	142	100%
	η	120	49%	126	51%	246	100%
	u	64	94%	4	6%	68	100%
金沢文庫本天台大師畫讃		<b>213</b>	<b>79%</b>	<b>22</b>	<b>8%</b>	<b>268</b>	<b>100%</b>
	m	3	100%	0	0%	3	100%
	n	3	100%	0	0%	3	100%
	η	12	100%	0	0%	12	100%
	u	8	100%	0	0%	8	100%
金沢文庫本五悔		<b>1</b>	<b>0%</b>	<b>118</b>	<b>21%</b>	<b>556</b>	<b>100%</b>
	m	0	0%	6	100%	6	100%
	n	1	33%	2	67%	3	100%
	η	0	0%	5	100%	5	100%
魚山六卷帖五悔	n	<b>0</b>	<b>0%</b>	<b>52</b>	<b>19%</b>	<b>280</b>	<b>100%</b>
		0	0%	5	100%	5	100%
魚山六卷帖九方便		<b>1</b>	<b>0%</b>	<b>43</b>	<b>12%</b>	<b>359</b>	<b>100%</b>
	m	1	100%	0	0%	1	100%
	n	0	0%	1	100%	1	100%
金沢文庫本九方便		<b>0</b>	<b>0%</b>	<b>123</b>	<b>19%</b>	<b>649</b>	<b>100%</b>
	m	0	0%	1	100%	1	100%
	n	0	0%	7	100%	7	100%
	η	0	0%	2	100%	2	100%
正保版魚山私抄九方便	n	<b>0</b>	<b>0%</b>	<b>2</b>	<b>0%</b>	<b>620</b>	<b>100%</b>
		0	0%	1	100%	1	100%
岩瀬文庫蔵延慶二年識語本和漢朗詠集		<b>3256</b>	<b>80%</b>	<b>606</b>	<b>15%</b>	<b>4053</b>	<b>100%</b>
	m	45	87%	7	13%	52	100%
	n	145	95%	7	5%	152	100%
	η	147	90%	16	10%	163	100%
	u	67	99%	1	1%	68	100%
専修大学図書館本和漢朗詠集		<b>3236</b>	<b>79%</b>	<b>592</b>	<b>14%</b>	<b>4089</b>	<b>100%</b>

		m	39	83%	8	17%	47	100%
		n	132	94%	8	6%	140	100%
		ŋ	152	87%	22	13%	174	100%
		u	63	98%	1	2%	64	100%
南北朝	新猿楽記_尊経閣文庫_康永本		<b>530</b>	<b>69%</b>	<b>239</b>	<b>31%</b>	<b>772</b>	<b>100%</b>
		m	4	40%	6	60%	10	100%
		n	9	28%	23	72%	32	100%
		ŋ	19	58%	14	42%	33	100%
		u	15	88%	2	12%	17	100%
	東洋文庫本法華経音訓		<b>1712</b>	<b>78%</b>	<b>434</b>	<b>20%</b>	<b>2206</b>	<b>100%</b>
		n	1	100%	0	0%	1	100%
		u	1	100%	0	0%	1	100%
室町	国会図書館本本朝文粹卷六		<b>229</b>	<b>37%</b>	<b>81</b>	<b>13%</b>	<b>621</b>	<b>100%</b>
		m	0	0%	1	100%	1	100%
		n	5	83%	1	17%	6	100%
		ŋ	16	89%	2	11%	18	100%
		u	3	100%	0	0%	3	100%
	邦訳日葡辞書		—	—	—	—	29840	—
		m	219	74%	78	26%	297	100%
		n	881	71%	360	29%	1241	100%
		ŋ	823	74%	282	26%	1105	100%
明治	和英語林集成第三版		—	—	—	—	26669	—
		m	228	87%	35	13%	263	100%
		n	929	87%	134	13%	1063	100%
		ŋ	851	88%	120	12%	971	100%
		u	479	96%	18	4%	497	100%
昭和	三省堂初版明解日本語アクセント辞典		—	—	—	—	77588	—
		m	777	89%	92	11%	869	100%
		n	3212	93%	256	7%	3468	100%
		ŋ	3387	94%	228	6%	3615	100%
		u	1851	98%	32	2%	1883	100%
総計			18543	85%	3298	15%	21841	100%

- ・大般若波羅蜜多經\_根津美術館の声点については、清濁を厳密に書き分けているかどうかの問題となる。特に単点が清音専用なのか、あるいは濁音にも用いられているのかについて、単点が付される異なり字 1601 字、7472 例について先の B4 で作成した「漢辞海字音表」で調べてみると、呉音が濁音のみの字は 167 字 599 例であった（ただし 314 字 644 例は字音表になし）。よってこの 599 例は濁音にもかかわらず、単点が差声されている疑いがあるが、そのうち漢音・慣用音に清音が含まれ、これらの混入であると解釈が可能な例が 155 字 583 例（「眷屬朋<sub>(去)</sub> 黨」「遠離頻<sub>(平)</sub> 蹙」など）あり、12 字 14 例（「放逸謬誤<sub>(去)</sub>」など）のみが濁音に単点が付された可能性が高い例として指摘できる。誤りなどの可能性も考えると、基本的には声点の単点と双点の使い分けによって、清濁を厳密に標示しようとしていると判断できる。ただし、単点と双点の使い分けが単字の声調標示を志向しており、漢語単位で起こった連声濁・連濁を差声に反映させていない可能性があり、平安から鎌倉にかけての生起率の増大を通時的変遷の事実として認めるかどうかについては保留する。
- ・多くの資料では、m・n・ŋ 韻尾後の生起率が類似し、u 韻尾後はそれよりも低い生起率をとる（色葉字類抄、四座講式諸本、邦訳日葡辞書、和英語林集成、三省堂アクセント辞典）。

- ・ m・n 韻尾後に比べて、ŋ 韻尾後の連声濁生起率が低い資料に、阿弥陀経\_西本願寺（鎌倉）、新猿楽記\_尊経閣文庫\_弘安本（鎌倉）、尊号眞像銘文\_専修寺\_広本（鎌倉）、唯信抄\_西本願寺（鎌倉）、唯信鈔\_専修寺（鎌倉）、新猿楽記\_尊経閣文庫\_康永本（南北朝）があり（表赤マーカー部分）、親鸞関係と新猿楽記に多い。鎌倉時代あたりから、ŋ 韻尾由来のウから鼻音性が消失しつつあることが反映しているか。ただし、ŋ 韻尾後と u 韻尾後の濁音化生起率がまったく同等に低くなるという現象はどの資料でも見られない。

⇒連声濁の減退への ŋ 韻尾の u への合流の影響は、減退の要因としては大きいものでないことが推測される。

- ・日葡辞書では鼻韻尾音 m・n が前接する環境のみならず、非鼻音 ŋ (>u) の後でも濁音標示が減退している。また日葡辞書以降、m・n・ŋ 韻尾の連声濁生起率は似た値をとる。中世末から近代にかけての減退には、鼻音性が関与しない要因があるか（「B 音的条件が関わらない減退要因」）。

### 字音系統別の連声濁生起率

次に、u 韻尾を除いた 17785 例について、呉音主体の資料、漢音主体の資料に分けて整理する。また『尾張国郡司百姓等解文』『新猿楽記』『邦訳日葡辞書』『和英語林集成』『三省堂初版明解日本語アクセント辞典』は呉音と漢音のどちらが主体か判断しがたいため、「呉音・漢音」とした。

表 4 字音系統ごとの清濁標示

	清		濁		計	
呉音	1539	56%	1230	44%	2769	100%
漢音	1630	87%	238	13%	1868	100%
呉音・漢音	11394	87%	1704	13%	13098	100%
新漢音	20	40%	30	60%	50	100%
計	14583	82%	3202	18%	17785	100%

- ・沼本 1982 等で指摘されるように、呉音に比べて漢音は連声濁が生じにくい。
- ・呉音が連声濁しやすく、漢音が連声濁しにくいという現象に対する解釈はさまざまである。これらの重要度を判断するのは容易ではないが、窪藪 1999 の言う単字の字音形をそのままの形で残すという忠実性の原理が呉音よりも漢音で働きやすいのは、これらの複数の要因が絡まり合っているものと考えられる。
  - ・漢音の日本化の程度が低かった為（沼本 1986）
  - ・呉音よりも漢音の方が語構成上の分析がより容易であるため（江口 1994）
  - ・相対的に漢音は呉音よりも文章語に近い（高山倫明 2018）
- ・なお新漢音資料については、天台大師畫讃を除けばほぼ濁音標示のみで、特に注意を要する濁音に対して加点される。この濁音標示専用の声点の影響が大きく、清音と濁音の比率に積極的な意味はないものと思われる。

### 位相別の生起率

DHSJR には、さまざまな性格の資料が格納されていることを利用し、位相差を確認する。

表 5 資料の性格による清濁標示の違い

	清		濁		計	
漢文訓読資料	512	96%	24	4%	536	100%
字書・辞書	11766	87%	1732	13%	13498	100%
和化漢文訓読資料	747	80%	187	20%	934	100%
漢文直読資料	617	73%	228	27%	845	100%
和文資料等	941	45%	1149	54%	2090	100%
<b>総計</b>	<b>14583</b>	<b>82%</b>	<b>3202</b>	<b>18%</b>	<b>17785</b>	<b>100%</b>

- ・漢文訓読資料は漢音主体資料がほとんどであり、位相差の影響とは見なしがたい。
- ・和文資料等の連声濁生起率が高いのは、連声濁は和化・日本語化の一環であるという意見を踏まえれば、理解しやすい。
- ・漢文直読資料の連声濁生起率が和化漢文訓読資料より高いのは、阿弥陀経\_西本願寺の生起率が高いことが影響している。

#### 連声濁を起こさない字について

呉音主体の資料において、呉音・漢音・慣用音に濁音形がない字が鼻音韻尾（m・n・ŋ）後に位置した場合に、次のように頻度が高いにもかかわらず濁音標示が見られない字がある。呉音主体資料の範囲で、鼻音韻尾後の出現頻度が8以上のものを挙げる（括弧内は頻度。また呉音が連濁を起こす可能性がない「和」「會」を除く）。

表 6 連声濁を起こさない字（空欄は用例がないことを示す）

	平声	平声軽	上声	去声	漢語例
光 (40)	7		7	26	青色青光、法身光輪偏法界、不斷光、神光、心光、千光
棺 (28)	24	4			金棺、聖棺
黨 (16)	2			14	阿素洛兕黨損減、朋黨損減、心無偏黨
海 (13)	2		2	6	大心海、願海、唯說彌陀本願海、花嚴海會、溟海、生海
紫 (12)	1			11	赤白紅紫、紅紫碧緑、身紫金色頂有肉髻、光明紫雲
射 (11)	6			3	善閑射術、仰射虚空
諸 (11)	6		1	4	并諸菩薩摩訶薩、涌生諸菓、盛諸光明、定散諸機
首 (10)	10				衆生但觀首相、上首
閉 (10)	5			5	關閉一切、惡趣自然閉、自然閉、封閉
炬 (10)	1			9	作明燈炬、香炬、灯炬
呿 (10)	0			10	師子欠 <sup>カム</sup> 呿 <sup>コ</sup> 三摩地、頻申欠 <sup>カム</sup> 呿 <sup>コ</sup>
申 (9)	8				師子頻申、壬申歲
儉 (8)	7				寒熱豐儉、或好廉儉、性不廉儉
刹 (8)	3	5			安樂淨刹、十方微塵刹土、安養淨刹、他方刹
環 (8)	3			5	如是循環、紅環間飾、循環覓手、旋環
癩 (8)	6			1	風狂癩癩、背癩癩、攣臂癩癩

- ・当該字の差声に偏りは見られず、連声濁を起ささない字と声調との間に明確な関係は見出せない。
- ・この中には、直前に語の境界が位置すると解釈できるもの（「諸」）、繰り返し現れる特定の漢語にしか現れないもの（「棺」「痲」など）、梵語音訳字「呿」が含まれ、これらに連声濁例がないことは首肯できる。
- ・しかし「光」「棺」「海」「閉」等、説明が難しい例もある（「信」「空」「之」「智」「起」「三」「僧」「止」など、連濁例の少ないものも含めると相当数に上る）。これらは字音形態素の語形と意味との結びつきが強く、連声濁が許されなかったか。「意味伝達の効率性」（佐藤・横沢 2018）を優先して連濁を回避しようとした結果、窪菌 1999 の言う忠実性の原理、すなわち単字の字音形をそのままの形で残したいという原理が強く働いたものと解釈される。

### 声調との関係

例が多く収集できる資料を選んで、m・n・ŋ 韻尾に後接する字の声調を調査した。参考のために、資料全体の分布（延べ語数）、語頭に限った分布（延べ語数）<sup>10</sup>も合わせて示す。なお、入声、フ入声、平声軽、入声軽、複数の声点が差声されている例は除いてある。

表 7 m・n・ŋ 韻尾に後接する字の声調

		平		上		去		計		
根津美術館 大般若波羅蜜多經	全体	3430	49%	1316	19%	2212	32%	6958	100%	
	全体 (語頭)	677	51%	86	6%	577	43%	1340	100%	
	延べ	清	205	52%	25	6%	163	41%	393	100%
		濁	13	42%	4	13%	14	45%	31	100%
	異なり	清	93	54%	13	8%	65	38%	171	100%
濁		6	35%	3	18%	8	44%	17	100%	
阿弥陀經 西本願寺	全体	771	31%	894	36%	822	33%	2487	100%	
	全体 (語頭)	139	31%	7	2%	298	67%	444	100%	
	延べ	清	42	27%	29	18%	86	55%	157	100%
		濁	41	25%	37	23%	84	52%	162	100%
	異なり	清	29	29%	23	23%	49	49%	101	100%
濁		28	32%	18	20%	42	48%	88	100%	
三帖和讃 専修寺	全体	1553	46%	1083	32%	714	21%	3350	100%	
	全体 (語頭)	618	45%	383	28%	376	27%	1377	100%	
	延べ	清	118	55%	29	13%	69	32%	216	100%
		濁	96	45%	45	21%	70	33%	211	100%
	異なり	清	41	44%	20	22%	32	34%	93	100%
濁		24	40%	5	8%	31	52%	60	100%	
尊經	全体	4315	60%	1369	19%	1564	22%	7248	100%	

<sup>10</sup> 語中の声調変化の影響を避けるために、語頭のみで集計を行ったもの。

	全体 (語頭)		2676	62%	614	14%	1053	24%	4343	100%
	延べ	清	258	59%	64	15%	114	26%	436	100%
		濁	83	58%	13	9%	46	32%	142	100%
	異なり	清	175	60%	40	14%	77	23%	292	100%
濁		67	55%	12	10%	43	35%	122	100%	
宝曆版四座講式	全体		2449	53%	1364	30%	777	17%	4590	100%
	全体 (語頭)		1100	48%	608	27%	578	25%	2286	100%
	延べ	清	87	48%	27	15%	69	38%	183	100%
		濁	70	29%	53	22%	115	48%	238	100%
	異なり	清	50	43%	17	15%	50	43%	117	100%
		濁	26	33%	14	18%	38	49%	79	100%
庫新 康猿 永楽 本記 尊 經閣 文	全体		351	54%	153	24%	147	23%	651	100%
	全体 (語頭)		179	54%	40	12%	110	33%	329	100%
	延べ	清	20	63%	2	6%	10	31%	32	100%
		濁	24	59%	1	2%	16	39%	41	100%
	異なり	清	19	61%	2	6%	10	32%	31	100%
		濁	23	58%	1	3%	16	40%	40	100%

朱字：当該声調において、資料全体における語頭例の用例の割合と、連声濁が生起した（生起しなかった）用例の割合に、10ポイント以上の差がある部分

赤網掛け：連声濁が生起しなかった場合（「清」）の前接字声調の割合と生起した場合（「濁」）の前接字声調の割合に、10ポイント以上の差がある部分

- ・多くの資料（特に『宝曆版四座講式』）においては、連声濁を起こしている字の前接字の平声の割合が、資料全体（語頭）の平声字の割合よりも低い。また平声字が前接する鼻音韻尾字については、清音標示が濁音標示を上回る資料が多い。ここから、鼻音韻尾字が平声であることと、連声濁を起こさないことの間には、相関関係が見て取れる。
- ・多くの資料（特に『宝曆版四座講式』）においては、連声濁を起こしている字の前接字の去声の割合が、資料全体（語頭）の去声の割合よりも高い。また去声字が前接する鼻音韻尾字については、濁音標示が清音標示を上回る資料が多い。
- ・従来は去声の後に連声濁が起こりやすいとされていたが、「濁」における去声字の占める割合と、「清」・全体・語頭における去声字の割合との比較において、それほど明示的な差は見出せない。
- ・ただし、「清」の例が多いことが影響を与えている可能性がある。DHSJRでは、特に字音直読資料で語の認定を大きめに行っているようであり、これまでの研究で語頭と判断されると思われる例が語中として扱われている例が多いと考えられる（「屈伸（平）顧（平）視」〔20-001-01-013062 大般若波羅蜜多經\_根津美術館〕、「衆生（上濁）生（去）者」〔30-010-01-000361 阿弥陀經\_西本願寺など）。したがって、これらを考慮にいれば「清」と「濁」の差がさらに大きくなる可能性があるが、今後の課題としたい。

## まとめ

以上の報告をまとめておく。それぞれの変遷の事実の認定について留保をしながら、次のことを指摘

した。

1. 連声濁の減退の要因とされた、 $\eta$  韻尾の u 韻尾への合流、濁音の弁別的特徴の交替（鼻音性の消失）という2つの要因は、DHSJR の範囲では明確な影響が見取れるとは言えない。
2.  $\eta$  韻尾後の連声濁が減少することは、個別の語には認められる（名目抄の「同心」など）ものの、全体的には、u 韻尾と同じように非連声濁形が選ばれるわけではなく、濁音形として語彙的に定着したものが徐々に単字の清音形に回帰しているのではないか。
3. 漢音主体資料の連声濁生起率は、先行研究で指摘されるように小さい。
4. 和文資料では連声濁が起りやすい。
5. DHSJR を通して、頻度が高い字でも、鼻音韻尾後に位置するにもかかわらず連声濁を起こさない字、起こしにくい字が相当数ある。これらは字音形態素の語形と意味との結びつきが強く、連声濁が許されなかったか。
6. 声調との関係の量的側面について、従来は去声の後ろで連声濁が起りやすいとされているが、資料の声点体系の全体的分布と、連声濁が起らない例の分布を考慮に入れると、それほど明示的な差は見出せない。

## 参考文献

- 江口泰生 1993 「漢語連濁の一視点—貞享版『補忘記』における—」『国語国文』62-12、15-28
- 江口泰生 1994 「連濁と語構造」『岡大國文論稿』22、375-366
- 榎木久薫 1988 「光明真言土沙勸信記における字音の清濁について：連濁に関する考察を中心として」『東洋大学短期大学紀要』19、69-79
- 奥村三雄 1952 「字音の連濁について」『国語国文』21-5、327-340
- 金田一春彦 1976 「連濁の解」『Sophia linguistica』2、1-22（『日本語音韻音調史の研究』（吉川弘文館、2000）、『金田一春彦著作集 第6巻』（玉川大学出版部、2005）に再録）
- 窪蘭晴夫 1999 『現代言語学入門2 日本語の音声』岩波書店
- 小林芳規 1970 「院政・鎌倉時代における字音の連濁について」『広島大学文学部紀要』29-1、1-35
- 佐々木勇 1998 「三重県専修寺蔵『三帖和讃』における字音の連濁」『広島大学学校教育学部紀要・第II部』20、206-197
- 佐藤武義・横沢活利 2018 『連濁の総合的研究』勉誠出版。
- 鈴木豊 2016 「字音形態素「シヨ(所)」の連濁—「研究所」「保育所」を中心に—」『文京学院大学外国語学部紀要』15、1-14
- 高山知明 1997 「漢語形態素の連濁のあり方」『香川大学国文研究』22、26-34
- 高山倫明 1992 「連濁と連声濁」『訓点語と訓点資料』88、115-124（『日本語音韻史の研究』（ひつじ書房、2012）に再録）
- 沼本克明 1982 『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』風間書院
- 沼本克明 1986 『日本漢字音の歴史』東京堂出版（『日本漢字音の歴史 新装版』（2023）再刊）
- 沼本克明 1997 『日本漢字音の歴史的研究—体系と表記をめぐって—』汲古書院
- 浜田敦 1960 「連濁と連声—同化の問題」『国語国文』29-10、1-16（『日本語の史的研究』（臨川書店、1984）に再録）
- 飛田良文 1966 「明治大正時代の漢語の連濁現象」『東北大学日本文化研究所研究 報告』2、251-266
- 肥爪周二 1996 「日本漢字音における喉内鼻音韻尾の鼻音性—「(エ) イ」の形をとる場合」『山口明穂教

授還暦記念『国語学論集』明治書院、244-263（『日本語音節構造史の研究』（汲古書院、2019）に再録）

福永静哉 1959「同一経典に於ける字音連濁現象の変遷」『女子大國文（京都女子大学国文学会）』13、42-45

山田昇平 2015「漢語の連声濁について—歴史的視点に基づく分析—」国語語彙史研究会編『国語語彙史の研究 三十四』和泉書院、384-368

山田昇平 2018「二字漢語「一山」の連濁とその歴史」国語語彙史研究会編『国語語彙史の研究 三十七』和泉書院、322-303